

三歳児クラスの子どもたち

集団生活を始めたばかりの頃

……二〇〇〇年一学期の記録より

実松 瑞栄

はじめに

私に絵が描けるなら、『三歳児たち』という題の下に、『背中に小さな白い羽を持ち、透明な球にすっぽりと包まれた小さな子どもが、笑ったり泣いたり飛び跳ねたりしている絵』を描いてみたい。数年ぶりに三

歳児を受け持った時、私はそんな思いを持った。そして、目の前の一人一人に、まだ形にならない大きな柔軟性や可塑性を感じる一方で、彼等がしだいに自分なりの姿を形づくっていくのを支えるには、この子たちを取り巻く環境は、なんと騒々しく忙しく殺伐としていることかとの思いも持った。

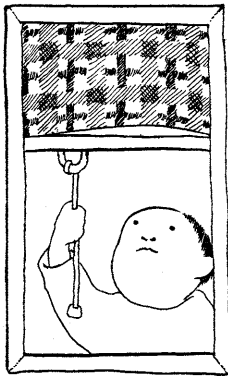
しかし、久し振りの新鮮さの中でこんなことを思いながらも、三歳児の子どもたちとの一学期の生活を振り返ると、担任の私もまた、子どもたちの柔らかな神経を痛めるような粗雑なかかわりをいろいろしてしまつたという思いがある。四・五歳児とは大きく違うことを感じながらも、つい、四・五歳児にかかわる時と同じような気持ちでかわつていたと思うことも多い。ここでは、そうした自分と子どもとの生活の断片のいくつかを振り返り、子どもの心の近くに寄り添うということについて思いを巡らしてみたい。

守つてあげられなくてごめん

(イ) 砂場の横に、繫げたり押したりして遊ぶ車型の砂場用具が籠に入れて置いてあった。T男は、その籠の中から一台ずつ車を出しては、側のテーブルの上に並べ、長く繫いで遊んでいた。そこへH男が来た。H男はT男の様子を面白そうに見て、自分も籠から車を

出し、T男がならべている反対側に繫ごうとした。ふと後ろを見てそれに気付いたT男は「うわーん」とびっくりするような大声で泣き出す。(五月九日)

(ロ) D男は、たくさんの友達が、砂場や、ウサギのいるサークルや三輪車などで遊んでいる庭にニコニコしながら出て行く。そして、ままごと用の食器が置いてあるところに行くと、そこから一枚の皿をとり、トコトコと歩いて、それを庭の真ん中あたりの平らなところに置く。そしてまた次の食器を取りに行くと、またトコトコと歩いてそれを前の皿の横に並べる。トコ



トコを繰り返して、皿が五、六個ならんだ頃、その側をK男たちが走って通り過ぎる。皿はK男たちの足に当たってグシヤグシヤになる。D男はそうなつた皿をびっくりしたように見つめる。D男の目から涙がポロポロ流れ出す。涙でいっぱいの顔のままD男は、母親が帰って行った門の方へ走り出す。(五月十二日)

*D男もT男も楽しそうに遊んでいる友達の側について、自分もまたしたいことを始めて遊ぶ。したいことがチャーンとあり自分で始められる。そして自分のしたいことに没入して遊んでいると、急に思いもかけず他の人がその遊びを壊してしまう。今まで家庭でこんな理不尽なことをされたことのない二人は仰天する。そして泣き、母親を求める。

*信頼しきっている周りに、裏切られたりかき乱されたりすることなく、ゆつくりと物に向き合い、自分の世界を広げながら遊ぶ姿を包み守ってあげたい。

それができなかつた時はせめて、驚き泣かねばならない心をしつかりと受け入れ抱き止めてあげたい。他の子への対応に忙しくはあったが、『こうして、大きくなるんだよ』『三歳児って可愛いな』と外側から見守る気持ちがあつたから、かけつけることが遅くなつたし、受け止めにも暖かさが足りなかつたんだと胸が痛む。

先生、気がつかないでいたんだね

(イ)よい天気でみんな外に出て遊ぶ。ふと保育室を覗くと、H子が一人でままとコーナーで遊んでいる。年長組に姉がいるH子は、この頃、登園するとすぐ姉のいるクラスに行き、そこで姉やその友達に遊んでもらい、降園時刻が近付くと送ってもらって保育室に帰って来ていた。そのH子が一人で三歳児組の保育室で遊んでいる。私は寂しくないかと思い、窓から覗いて「H子ちゃん」と声を掛ける。H子は私の方を

見るとニッコリ笑い、「これ見て」と言うようにテールブルが見えるように体をよじる。テールブルの上には四、五個の皿がならび、どの皿の上にも果物やおむすびやパンが一つずつのせてある。

その頃、そこでの他の子の遊び方は、そこにある食器や食物や衣装をあるだけみんな出して取り散らかすような遊び方だったので、H子の整然とした遊び方に驚く。

(五月一日)

(ロ) 例年、四月中旬ごろから、幼稚園の空にはこのぼりが泳ぎ、保育者はその下にカセットテープをもちだして、周りの子どもたちと「こいのぼり」や「竹の子体操」を踊って楽しむ。そして五月の連休前日の一日は、全園児を大きい園庭の方のこいのぼりの下に誘い、一緒に踊ったり空を見上げたりお菓子を食べたりにして過ごす。無理やり集めるわけではないが、保育者もみんな集まり、たくさんの友達と一緒に踊ったりすること、こどもの目を迎える喜びが盛り上がる一

日になればと考えてのことである。

今年も五月二日十時ごろ、「今日は、大きな庭で一緒に踊りましょう」という放送が流れる。三歳児も保育者が「行って見ようよ」と誘うとみんなついてくる。が、O子だけは保育室から出ない。大きな園庭の様子は三歳児組の保育室からは遠くて見えないので、一人で寂しくないかと何度か誘って見る。がO子はしっかり首を振る。気がかりだがO子だけ保育室において大きい園庭に行く。

そこで踊ったり、周囲にある遊具などで遊んだりして保育室に帰ると、O子がニッコリ迎えてくれる。保育室には、四、五個の椅子が並べられている。そしてその椅子の上には人形が一人ずつ、洋服を着せてもらって座ったり、バスタオルを掛けてもらって寝たり、膝にお皿を乗せていたりする。O子は一人ではなかった。たくさんの人形たちと遊んでいたのだ。

(五月二日)

* H子もO子も姉がいる。その姉にいつも遊んでもらっている二人は、保育室のままごとコーナーにある遊具で姉がするようなことをしてみたいと思っていたのだろう。でもいつもそこをたくさんの子が使う。その子たちは、そこにある物をみんな出して、

あたり中を取り散らかした状態にする。この二人がやってみたく遊び方ではない。おとなしくてわきまえのある二人は、自分の気持ちを保育者に訴えることもせず、他のところで他の遊びをしてすすす。そして、H子の方は、他の子がいない時にそつとそつと遊ぶ。O子の方は、やつとここで遊べることになった日に初めて、保育者に強く自分の願いを主張する。

この二人にわきまえがあることをいいことに、上に姉がいるから慣れているだろうと気を抜いていかかわりが鈍感であったなと思う。自由に遊ぶ毎日の中で、自分の思いをはっきり表出して遊べる子ば

かりが、したいことをして得をするような園生活に
ならないよう、おとなしかったり我慢したりする子
にもしっかりと目を注いでおかねばと自分を戒める。

心の育ちはゆつくりと

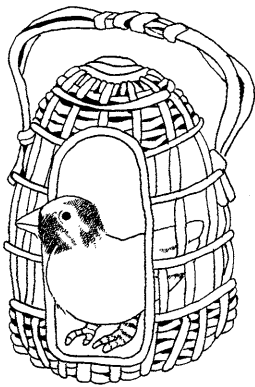
保育室の一隅のままごとコーナーで、A男・T男・N子・Y子の四人が、皿を並べたり、バスタオルを掛けて寝たり、絵本を見たり、引き出しから洋服を出したりなど、したいことをして遊んでいる。それぞれが勝手にしたいことをしているのに、四人がバラバラでなくなんだか一緒に遊んでいる気になっているらしい雰囲気があることと、それぞれの勝手をお互いに認めあつてぶつかり合うことなく遊びが続いている様子に「おや！」と思う。これまでも、毎日誰かがここで遊び始め、そこへ次々と遊びたいと思う子が入っていくという日々だったが、その場に人が集まるとじきに、物の取り合いが生じて掴み合いになったり、誰かが皿

をならべると誰かがそれをひっくり返して大泣きになったり、誰かが気分に応じて物を投げ出しみんながそれを真似したりして、そこでの遊びはすぐに終わるという状態がいつものことだったからである。

それなのにこの日、このような遊びが続いているのは四人それぞれがお母さんなどの役になって遊んでいるからようだった。たぶん、上に小学生の姉がいてお家ごっこなどの仲間にいれてもらうこともあるだろうN子かY子のどちらかが、役になることを提案し、それを他の三人が受け入れることができ、そのことがとても嬉しくて、つながりを感じながら遊べることになったのであろう。

四人がそのように遊んでいるところに、戸外でひと遊びして満足した様子のU男が帰って来る。そして四人が楽しそうに遊んでいるところに入って遊ぼうとする。四人のなかのT男とはそれまでも時々かかわって遊んでいたから、T男と遊ぼうと思ったのかも知れな

い。ところが、A男が「だめ、来ちゃだめ」と強い口調で言う。いつもなら、そこは、いつでも誰でも遊んでいいところだったから「だめ」と言われても何のことも分からなかったらしいU男は、A男の言葉に関係なく遊ぼうとする。すると、四人が口々に「だめ」「だめ」と言う。やっと拒否されたことに気づき、しかもその拒否をT男までがするのに出会ってU男はびっくりする。そして大声で「うわーん」と泣き出す。保育者には、その日初めて一緒に遊び、しかも役になって遊ぶなどという面白い遊びを思い付いた四人



の子どもたちが、そこに他の子を入れてあげる余裕などないことは分かる。それでも一応「一緒に遊びたいんだって。入れてあげられない？」と聞く。自己主張の強いA男がいつもの調子で「だめ、だめ」と強い口調で言い、他の三人も「だめ、だめよねー」などと言う。U男はいっそう大きな声で涙をポロポロ流しながら泣く。そこで保育者は「そうか、今日は四人で遊びたいんだって。U男君は先生と一緒に他のことをして遊ぼうか」と言う。しかし、U男は首を振って大声で泣き続ける。保育者は四人に「U男君の顔を見てごらん。とっても悲しいんだよ。今日だめだったら、明日遊ぼうねって言ってあげようよ」と言う。しかし、A男は、「だめだめ、明日も一緒に遊ぶんだから、ねー」と他の三人に言い、三人も「うん」と言う。U男はいつまでもいつまでも大声で泣き続ける。

(六月二十一日)

* 語彙の少ない子どもは、自分の思いに反することがあった時、すぐ「だめ」とか「いや」とか言う。そしてそれを言われた方は、否定されたり拒否されたりして、泣いたりあきらめたり怒ったりする。しかし、「だめ」「いや」と言う子の本当の気持ちは、全面否定ではなくいろいろな意味を持つことが多い。だから、「(今、途中だから)ちょっと待ってね」とか「(今日はこの人と遊ぶから)明日にしてね」というように、自分の気持ちを正確に言ったり、相手の気持ちを考えて優しい言葉で言えるように手助けしようと思っている。ここでも、「だめ」と言われたU男の気持ちに気付けるように、そしてU男に対する思いやりの言葉が掛けられるようにとかかわったつもりだった。しかし、これは間違っていた、こんな表面的な言葉だけの問題ではなかったと、後で思う。A男たちのここでの気持ちは、こんな楽しい遊びができているここへ、誰も来て欲しくない、遊

びを壊されたくないという必死の「だめ」であり、「明日もまたこうして四人で遊ぶんだ」という嬉しい嬉しい思いであったのだろう。だから、「明日遊ぼうね」などと嘘は言えなかったのだろう。一方、U男の方は、入れてもらって一緒に遊べなかったことよりも、だめだと言われたことが悲しくて悲しくて許せなくて、しばらくは泣き続けなければ気持ちが出まらなかつたのだろう。

ここでの私はその両者の気持ちを分かり認め、そして、U男の悲しい気持ちをしっかりと抱きとめることしかできなかったのだと思う。

保育者が、子どもの気持ちに気付かなかつたりそれを大切にしなかつたりして、子どもが、自分の気持ちを先生に分かつてもらえた嬉しさを味わえないような毎日を送っていて、どうして人の気持ちに気付き考える子になれるだろう。まだ三歳児に無理なことを求めてしまった。つい言動上のやさしさ

を求めてしまうけれども、心の育ちこそ大切なのにと反省する。

おわりに

子どもたちの生活に、「遊びの中で人間関係の打ち合いの体験をする機会がなくなってしまった」などと言われる。

今年の三歳児たちも、前述のような体験を出発として、打ち合いの体験をたくさん積み上げながら大きくなってほしい。しかし、その時に、「先生が自分の心の痛みの側に立ってくれなかつた」という思いを小さい時から持つようなことにならないようにしなければと思う。そうした思いを持つ子が、大きくなって問題を起こした子どもの中に何人もいるという。心したいと思う。

(山口大学教育学部附属幼稚園)